【アイデア】

スポーツ・インテグリティの定義と評価方法に関する一考察

庄司直人[*1]
Naoto Shoji[*1]

I. はじめに

近年、スポーツ界における主要課題の一つにインテグリティの向上が挙げられる。2023 年 11 月にはスポーツ庁長官名でインテグリティの向上に全力を挙げる旨の声明が発せられている。

インテグリィの向上に取り組む際に大きく二つの課題があると考えられる。その一つはインテグリティの定義の問題である。インテグリティの定義は曖昧であり、誠実性、健全性、高潔性などの訳語が定義とされている向きがある。しかしその場合、誠実さ、健全さ、高潔さの捉え方も多様であり、これらが何を意味するのか明瞭に定義することが必要となる。そのため、結果的にインテグリティの定義が定まらないまま議論が行われている。また、定義が定まらないがゆえにインテグリティの評価方法についても議論がほとんど進められていない。

そして二つ目は、スポーツに関わる組織として最も母数の多いスポーツチームなどの小さな単位の組織であり、多くのスポーツ関係者にとって最も身近なスポーツチームのインテグリティが定義されていないことである。インテグリティの向上はスポーツ関係者個人に意識させるだけでは不十分であり、国際スポーツ組織（ISO）、国際競技団体（IF）、国内競技団体（NF）などの大規模組織から一チームまでの各組織単位で取り組むことが必要である。しかし、これまでの研究動向を概観すると、ISO、IF、NF を対象とした研究が多く、一チームなどの小さな単位の組織を対象とした研究は、筆者らがスコーピング・レビューを行った結果、散見される程度である[8)]。

そこで、本稿ではスポーツにおけるインテグリティを育む取り組みが可能な環境を整える一助とするため、多くのスポーツ関係者にとって最も身近な組織であるスポーツチームに応用可能なインテグリティの定義と評価方法に関する一考察を示した。

II. わが国におけるスポーツ・インテグリティの定義

Gardiner et al. は、スポーツ・インテグリティを、スポーツそのもののインテグリティ（Inherent integrity of sport）、個人のインテグリティ（Personal integrity in sport）、組織のインテグリティ（The organizational integrity of sport）、手続的インテグリティ（Procedural integrity in the sport event）の 4 つに大別している[2)]が、本研究では組織のインテグリティに着目する。スポーツ・インテグリティの議論においてインテグリティそのものの意味、概念が整理されておらず[2)]、わが国においても定義が曖昧なままであることの一因は、このインテグリティの 4 つの側面がないまぜにされたまま議論が進められていることにあるようにも見える。議論を明確にし、後の研究に繋げるためにも、本稿では組織のインテグリティに関する議論を行うことを明確にしたい。

我が国のスポーツにおけるインテグリティの保護・強化はスポーツ庁が旗振り役となり推進されている。日本スポーツ振興センターでは、HP 上でスポーツ・インテグリティを「スポーツにおける誠実性・健全性・高潔性[7)]」とし、スポーツにおけるインテグリティを「スポーツが様々な脅威により欠けるところなく、価値ある高潔な状態[7)]」と定義している。我が国ではこの定義が一般的なスポーツ・インテグリティの議論に

受付日　2024.3.23
＊1　朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

用いられることが多い。第２期スポーツ基本計画では、「スポーツにおけるインテグリティ（誠実性・健全性・高潔性）とは、必ずしも明確に定義されているとはいえないが、ドーピング、八百長、違法賭博、暴力、ハラスメント、差別、団体ガバナンスの欠如等の不正が無い状態であり、スポーツに携わる者が自らの規範意識に基づいて誠実に行動することにより実現されるものとして、国際的に重視されている概念である[5)]」とされている。

そして、第３期スポーツ基本計画においては、インテグリティを「今後５年間に総合的かつ計画的に取り組む施策」の一つに掲げるものの、インテグリティの定義には言及していない[6)]。つまり、第３期スポーツ基本計画においては、インテグリティの定義は曖昧な状態にあることがわかる。または、定義の難しい概念であるがゆえに、拙速に定義せず時間をかける必要性を示唆しているとも考えられる。インテグリティの研究の推進、スポーツの現場におけるインテグリティを育むための取り組みの実践を推進するために、広く普及しやすいインテグリティの定義を示す必要があるといえよう。

III. スポーツにおける組織のインテグリティの定義

スポーツ領域におけるインテグリティに関する研究を概観すると、国際的には以下のようなインテグリティの定義の例がある。古くは、Teehan（1995）の「インテグリティは、人の行動とその人の道徳的イメージの統一の結果[10)]」がある。さらに、Mason（2001）は、Teehan（1995）[10)] の影響を受けながら「インテグリティは、外見上の行動（outward actions）と内的価値（inner value）の統合[4)]」とし、「インテグリティを備えた人は、自分の価値観、信念、原則に従って、自分がやると言ったことを実行する。たとえそうするのが得策であったとしても、決して内的価値から逸脱することがないため、信頼することができる。したがって、インテグリティの鍵は、内的価値に正直で誠実であるとみなされる行動の一貫性である[4)]」としている。現在のインテグリティに関する多くの研究において取り上げられている定義の一つに、勝田ら（2016）が紹介している Australian Sports Commission（ASC）の「インテグリティは内的価値と外見上の言動の統合である」を挙げることができる[3, 11)]。つまり、今広く知られているインテグリティの定義は、Teehan（1995）、Mason（2001）の影響を受けながら定められたものと考えられる[3, 10)]。さらにその勝田（2016）が紹介する ASC の資料では、インテグリティを備えた人は、その行動や言葉が、その人の価値・信念・原則と一致するとされている[3, 11)]。その後の研究においては、広くコンセンサスを得た定義は存在しておらず、Gardiner（2017）が示した通り、インテグリティの意味や概念が整理されていない状態が続いている[2)]。

ただし、注意が必要なことは、Teehan（1995）や、Mason（2001）と ASC が示したインテグリティの定義は、その内容から分かる通り、スポーツに関わる個人のインテグリティの定義としての性格が色濃いことである[3, 10-11)]。実際のスポーツ・インテグリティに関する研究は、スポーツにおける汚職、ベッティング、ドーピング、暴力などの特定の事柄と紐づけて行われていることがほとんどである。これらの研究において、個人のインテグリティの定義を用いるということは、その研究で扱う問題の原因を個人に帰属させるという前提を成立させることになろう。そのため、個人に原因を帰属させるのではなく、組織単位でその問題の解決を図ることが重要であるとの立場をとる研究においては、個人のインテグリティの定義が応用可能であるかについて、その都度吟味する必要があるだろう。

インテグリティの文脈で行われるスポーツ関連組織を対象とした研究は、選手とコーチの間の暴力・ハラスメント、もしくは、ガバナンスに関する研究がほとんどである。暴力やハラスメントの原因は、確かにある程度はその原因を個人に帰属することもできると考えられるが、実際にチームをつくりあげ運営（経営）していく上では、個人に原因を帰属させずに組織として未然に防ぐための仕掛けがより重要であると考えることができる。個人に原因を帰属させる立場をとる研究においては、個人のインテグリティの定義をそのまま適用することは可能であろう。しかし、スポーツチームなどのスポーツ関連組織で起こる問題を組織に帰属させる立場をとる場合、個人のインテグリティの定義をそのまま応用することが可能であるかについて検

討する必要があるだろう。

Ⅳ．既存の定義における有用性が高い点から学ぶ

既存の定義と先述の第２期スポーツ基本計画内のインテグリティの定義における「自らの規範意識に基づく誠実な行動により実現されるもの[5)]」との記述を参照すると、我が国のスポーツ庁が示した定義と、ASC が示した定義には次の点で共通項があると考えられる。その一つは、いずれもまず内的価値を重要視している点である[3, 5)]。スポーツ庁は規範意識[5)]としているが、それは ASC の示した定義における内的価値[3)]と近い関係にあるといえよう。次に、内的価値と同時に、行動を重視している点を挙げることができる[3)]。スポーツ庁は、規範意識に基づく誠実な行動によりインテグリティが実現されるとし、ASC はインテグリティが保たれた状態を、内的価値と言行が統合または一致した状態としている[3, 5, 11)]。この２点において両者のインテグリティの定義には共通する点があるといえる。この背景には、スポーツ庁がインテグリティを定義する際に、ASC を参考にしていることを留意する必要はあろう。

しかしながら、スポーツ・インテグリティにいち早く取り組んできたオーストラリアのスポーツを所管する ASC が示したインテグリティの定義[3, 11)]は、次の点において洗練された定義といえるだろう。一つは、インテグリティを備えた人の「状態」を示したことで、個人・組織・スポーツそのもの・手続的インテグリティのいずれを考える際も、特性ではなく状態として考えることができ、今ここでのインテグリティがどうなのかに目を向けることができることである。もう一つは、インテグリティが保たれた状態を評価する際に内的価値が重要な変数とされたことで、ある特定の価値観を重要なものと限定することがないことである。特に固定的な価値観を重要視するのではなく、当事者がどのような価値を大切にし、その大切にしている価値が実際の言行に現れているかどうかで評価することができることは、多様な価値観を持つ人、組織を対象としてインテグリティを考える際に非常に重要である。また、インテグリティを育むことを考える際に、①何を大切にし（どのような内的価値を持ち）、②その大切にしていることが体現されているか（内的価値と言行が一致しているか[3-4)]）、という二段階でインテグリティが保たれた状態にあるかどうかを評価することができ、研究を進める上でもチームづくりの実践においても非常に有用性が高いと考えられる。これらのことから ASC のインテグリティの定義は、多様な人々を対象にインテグリティを考え、インテグリティを育む取り組みを進める上で有用性が高く非常に洗練された定義であると考えられる。

対照的なインテグリティの定義の仕方を挙げると、Cleret et al.（2015）はインテグリティを健全さとして捉えているように見え、加えて八百長、ドーピング、不正などと距離を置くことがほぼ同義として考えられている[1)]。その場合、スポーツの脅威となり得る事柄と距離を置くことがインテグリティを向上させることとなるため、インテグリティ対策としては監視や規制に方策が限定される可能性が高い。これでは非常に息苦しさを感じる取り組みとなると同時に、チームや組織としてインテグリティを育む取り組みを進めるというよりは、何かをさせないための監視や規制を厳重にするという方向に進むであろう。そうした方策よりも、インテグリティにつながると考えられる価値観を大切にし、それらが実際に行動として現れることを目指し、インテグリティにつながる取り組みの推進や仕組みづくりなどの工夫を重ねる方が未来志向かつアクション思考の取り組みと言えるのではないだろうか。

そして、インテグリティの定義には「道徳」が含まれるものとすることが必要であろう。スポーツ・インテグリティは、人の善につながる考え方や行動へと人々を誘（いざな）うことで、反道徳的・反倫理的行為から守る概念として捉えることができる。スポーツ・インテグリティを考える際にこの「善」の方向に向かう内的価値が重要であることは当然のことであるが、強く認識する必要がある。インテグリティが内的価値と言行の一致を問うものだとすると、まずどのような内的価値を持っているかが非常に重要である。なぜならば、内的価値が「善」の方向に向かうものであることを条件にしなければ、仮にある人が邪悪な内的価値を持っているとし、その邪悪な内的価値を体現するような行動をとった時にもインテグリティが保たれた状態となって

しまう。例えば、「人類の進化の可能性を探ることが何よりも重要であり、そのためにはいかなる手段であっても採用するべきである」との内的価値を持った組織または人が、実際にドーピングなどの手段を取ることは、インテグリティが保たれた状態となるだろうか。つまり、人が直感的かつ普遍的に良いこととして捉えることができるという意味で道徳的な内的価値を持つことが、インテグリティが保たれた状態の絶対条件になると考えることができる。上述のような状況も想定し、スポーツ・インテグリティの定義には、内的価値が道徳的なものであることが明瞭にわかるようにすることが必要である。換言すると、インテグリティが保たれた状態は、「道徳的な内的価値」と「言行」が一致した状態と定義されるのが適切といえよう。

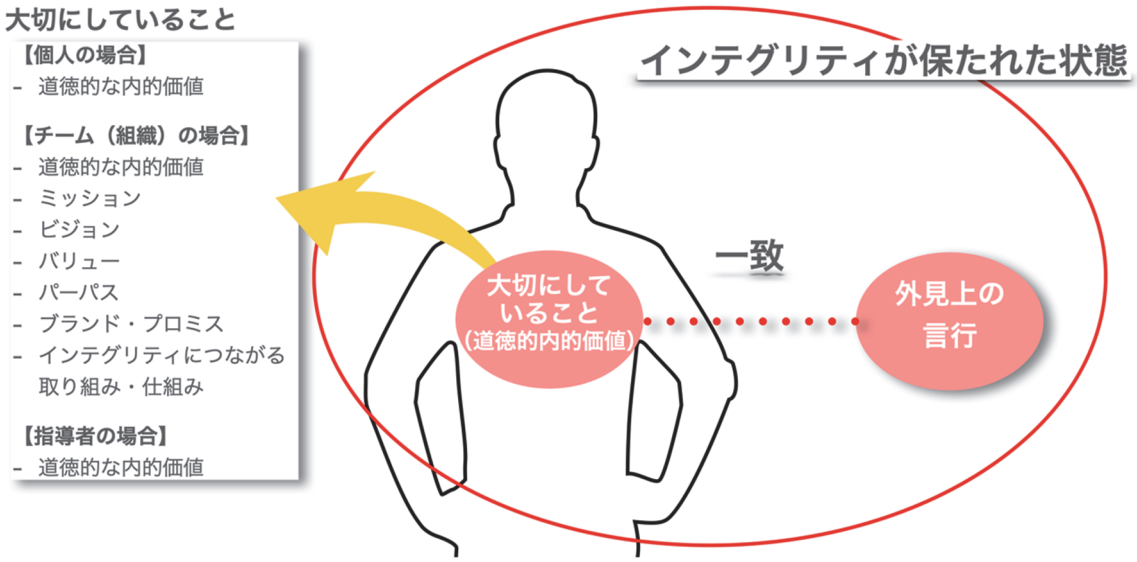

図　インテグリティが保たれた状態のイメージ
（出典：以下二つの発表資料をもとに筆者が改変。庄司直人（2022）スポーツ・インテグリティ・インデックス大学版開発に向けた下位尺度の検討、日本体育・スポーツ・健康学会第 72 回大会 発表資料。庄司直人（2024）学会企画シンポジウム①コーチングに活用するリーダーシップ理論の新機軸、日本コーチング学会第 35 回大会 発表資料。）

V．今後の研究を推進するためのインテグリティの定義に関するアイデア

現在のスポーツ界の状況を踏まえ、これからスポーツ・インテグリティの研究を推進していく上で、チームとしていかにインテグリティを育むかというテーマは主要課題の一つとなるであろう。チーム全体を研究対象として捉えチームのインテグリティを育む方法を検討する場合、従来の研究とは異なるアプローチをとることが必要となるであろう。その際のアイデアを以下に提示した。

まず一つ目のアイデアは、組織のインテグリティの捉え方についてである。スポーツチームのインテグリティを考える場合、３つの次元でチーム（組織）としてのインテグリティを捉える必要があるだろう。具体的には、一つ目は、選手全員の個人のインテグリティの総体に目を向けるべきであろう。二つ目に、組織のインテグリティである。組織全体を一つの人格のように捉え組織そのもののインテグリティを評価する場合には、組織特性に目を向ける必要があるだろう。例えば、組織の意思決定手続き、透明性を確保するための仕組み、ステークホルダーを関与させる仕組み、説明責任を果たす程度、パワーの所在、チェック・アンド・バランスの程度、ミッション・バリュー・パーパスなど組織が掲げる重要な価値の明確化とそれが体現できているかなど[8]、についても検討する必要があろう。そして、三つ目に監督・コーチなど選手以外のスタッフのインテグリティにも目を向ける必要がある。一般的に権威勾配が大きいスポーツチームにおいては、現場の最前線の責任者となる監督・コーチをはじめとしたスタッフの権威は大きく、チームに大きな影響を及

ぼすと考えられる。そのため、組織のインテグリティを捉えるためには、３つの異なる次元を包含することができるインテグリティの定義が求められるといえるであろう。

そして、二つ目のアイデアは、インテグリティの定義についてである。世界的に広く認知されている上述の ASC の定義を参考に、本稿においてインテグリティを「道徳的な内的価値と言行の一致」、インテグリティが保たれた状態を「道徳的な内的価値と言行が一致している状態」と定義する案を示したい[3-4, 11)]。インテグリティが保たれた状態を明確に示すことで、チームづくり、組織づくりを進める過程において、今ここでのインテグリティを見つめることが可能になると考えられる。

最後に三つ目のアイデアは、インテグリティの評価方法についてである。インテグリティを評価する際には、インテグリティにつながる価値観またはアクション（取り組み）を提示した上で、それについて二段階で評価することを提案したい。一段階目はインテグリティにつながる価値観またはアクションを大切にしているかどうかを問い、二段階目はその大切にしている価値観やアクションを実際に体現できているかどうかを問う方式である。これにより、インテグリティの定義である「道徳的な内的価値」がどのようなものであり、大切にしていることがどのくらいあるかを評価することと、「言行の一致」を評価することが可能になると考えられる。そして、インテグリティを評価する際には、性格特性を問うような質問ではなく、インテグリティを育む具体的な取り組みにつながるアクション志向になるよう質問の最後は動詞で終わるようにするなど、動的な質問にすることも肝要であろう。この方式については、筆者らが数回のトライアルを経て、インテグリティの評価方法として有用である可能性を確認した[9)]。

VI. おわりに

本稿では、スポーツにおけるインテグリティを育む取り組みが可能な環境を整える一助とするため、多くのスポーツ関係者にとって最も身近な組織であるスポーツチームに応用可能なインテグリティの定義と評価方法に関する一考察を行った。今後のインテグリティに関する研究の推進、スポーツチームにおいてインテグリティを育む取り組みを後押しするためのアイデアを３つ提示した。一つ目は、スポーツチームにおいては、インテグリティを、①選手のインテグリティの総体、②組織のインテグリティ、③監督・コーチを含むスタッフのインテグリティの３次元で捉えることを、インテグリティをより正確に捉えるためのアイデアとして提示した。二つ目は、インテグリティの定義を「道徳的な内的価値と言行の一致」とし、インテグリティが保たれた状態を「道徳的な内的価値と言行が一致している状態」と定義することを提示した。最後に三つ目として、インテグリティの評価方法について、どのような道徳的内的価値を保持しているか、その道徳的内的価値を体現できているかについて二段階で評価することを提示した。三つ目のアイデアは、インテグリティを育む取り組みを考える際に、どのようなことを大切にしているのかということと、その大切にしていることが実際に体現できているのか、という点で評価することで、インテグリティをより正しく評価するとともに、インテグリティを育む取り組みをより取り組みやすいものとすることを狙いとした。これらのアイデアがインテグリティ研究の推進、スポーツチームにおけるインテグリティ向上の実践を後押しすることを期待したい。

引用文献

1） Cleret, L. McNamee, M. and Page, S.（2015）‘Sports Integrity’ Needs Sports Ethics（And Sports Philosophers And Sports Ethicists Too）. Sport, Ethics and Philosophy, 9（1）, 1-5, doi: 10.1080/17511321.2015.1049015

2） Gardiner, S., Parry, J. and Robinson S.（2017）Integrity and the corruption debate in sport: where is the integrity?. European Sport Management Quarterly, 17（1）, 6-23, doi: 10.1080/16184742.2016.1259246.

3）　勝田隆，友添秀則，竹村瑞穂，佐々木康（2017）Protecting and Enhancing Sport Integrity through Education. スポーツ教育学研究，36（2），31-48，doi:10.7219/jjses.36.2_31.
4）　Mason, M.（2001）The Ethics of Integrity: Educational Values Beyond Postmodern Ethics. Journal of Philosophy of Education, 35（1）, 47-69.
5）　文部科学省（2017）スポーツ基本計画（第２期）．文部科学省，https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf（参照日 2024 年３月１日）.
6）　文部科学省（2022）スポーツ基本計画（第３期）．文部科学省，https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf（参照日 2024 年３月１日）.
7）　日本スポーツ振興センター．スポーツ・インテグリティの保護・強化に関する業務 スポーツ・インテグリティとは？．https://www.jpnsport.go.jp/corp/gyoumu/tabid/516/Default.aspx（参照日 2024 年３月１日）.
8）　Shoji, N., Matsuoka, Y. and Yoshida, T.（2023）Scoping review to identify key concepts for building sports organizational integrity. *Human Factors in Management and Leadership,* 92, 109-118, doi:10.54941/ahfe1003739.
9）　庄司直人，橋本朔来，松岡唯人（2023）スポーツ・インテグリティ・インデックス大学版使用方法の検討．人類働態学会会報，（114）.（印刷中）
10）Teehan, J.（1995）Character, Ethics, and Dewey's Virtue Ethics. Transactions of the Charles S Peirce Society, 31（4）Fall, 841-863.
11）Treagus, M., Cover, R. and Beasley, C.（2011）Integrity in sport. Canberra, ACT: Australian Sports Commission. https://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download.